

福音書を読んでいくと、イエス様を「教える人・教師」として描いている箇所が多くみられます。

ルカ福音書では、イエス様は公生涯の始めに誘惑を受けられたあと、ガリラヤのナザレにある会堂で語られています。またその他にも、神殿や会堂、山上など、さまざまな場所で教えておられます。

イエス様のこの行動は、当時のユダヤ教のラビや律法学者と重なるところもあったようです。そのためイエス様は、「主」の他にも「先生」や「ラビ」とも呼ばれることもありました。

しかし、マルコ福音書 1 章 22 節には、「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」とあります。

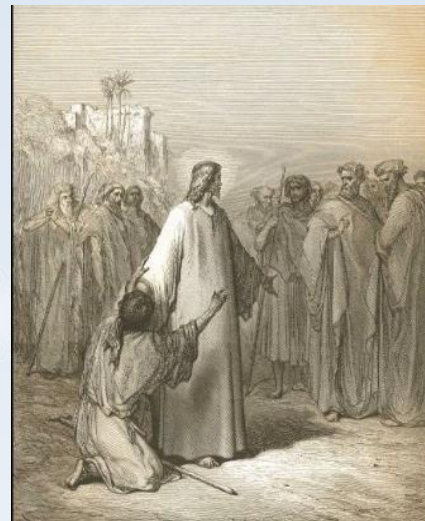
当時の律法学者は先人の教え(律法解釈)を忠実に伝達することを大切にしていました。「ラビ〇〇は言う、△△と」、と伝えることで、正しいと考えられていた教えを守ろうとしていました。

それに対しイエス様は、「アーメン、わたしはあなた方に言う」と、ご自分が権威ある者として語られるのです。

わたしたちはイエス様から、たくさんの教えを与えられています。普通の教師と生徒の関係では、生徒は教師から教わったことを守り、教師のような生き方をしようとします。

しかしイエス様とわたしたちの関係においては、イエス様のような生き方を目指すことももちろん大切ですが、イエス様から教わることによって、わたしたちはイエス様に従うように促されているのです。イエス様のような教師になるのではなく、イエス様と共に歩む。そしてイエス様はいつまでも、わたしたちを教え続ける方、わたしたちの教師であり続けるのです。

次回は「終わりの日」です。お楽しみに。



「悪霊に取りつかれた人を癒すイエス」
ギュスターヴ・ドレ (1832~1888年)

人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」

(マルコによる福音書 1 章 27 節)

